

大阪城天守閣

大阪市中央区

大阪城天守閣屋根の銅瓦の淡い緑青と黄金の装飾のハーモニーから、孤高の風格と往時の栄華が静かに伝わってくる。それは、初代築城（1585年）主・豊臣秀吉、2代目築城（1626年）主・徳川秀忠という乱世勝者の歴史をそこに見るからであろうか。2代目の天守閣は、3度の落雷で焼失し、天守台だけの時代が長く続いた。現在の天守閣は3代目で、1931年、当時の大阪市民の寄付によって築城された。天守閣焼失から実に266年ぶりのことだった。

設計は歴史的建築に造詣の深かった市井の建築家、古川重春。古川は、豊臣時代の天守復元を目指し、資料の乏しいなか、『大坂夏の陣図屏風』（重要文化財）を拠り所に各地の古建築の調査を重ねるなど、復元のイメージ作りで腐心をしたようだ。構造としては当時の最新技術だった鉄骨鉄筋コンクリート造（SRC造）を採用、城攻めの名人と言われた秀吉の「難攻不落」の城を彷彿させる強固な城が蘇った。

しかし、第二次世界大戦の戦禍、大型台風の被害によって戦後は長きに渡って修復が続けられてきた。1995年からは、再建時の姿の復元と耐震性の向上などを目的に足かけ2年にわたって大改修が行われた。屋根に葺かれていた0.5mm厚の銅板は、味わい深い古緑青がシンボルになっており、これを継承するために約55,000枚の瓦を一時撤去して清掃・補修したが、鳥の糞害がかなりひどかった。工業用の掃除機では吸引力が強過ぎて緑青まではがれてしまうため家庭用の掃除機で一枚ずつ汚れを取り、叩いて形を修正したのだという。その緑青は美しいまま、今も風格を保ち続けている。



豊臣秀吉が創建した初代大阪城天守閣は、豊田家の滅亡とともに1615年に焼失、徳川家による2代目の築城で地下の遺構だけになっているが、今も大阪市民には「太閤はんのお城」として親しまれている。5層8階建て延べ5,072㎡の規模で、威風堂々とした佇まいを見せる。1995年からの大改修では、全銅板瓦の2割を新しくしたが、残りの8割を創建時の古緑青に再生した。

